



「建設業は現場のイメージが強いのですが、パソコン作業などのデスクワークが8割くらいです」と笑う馬場さん

建設業の魅力を伝えるため、現場で活躍する人たちを紹介する動画がたくさん公開されています。(一社)北海道建設業協会が制作した「現場代理人の一日」に登場していたのが、旭川市に本社を置く(株)橋本川島コーポレーションの馬場達朗さんです。「石狩川改修工事の内 ウップツ川水門建設第2期工事」で現場代理人を務めた馬場さん。動画出演のほか、延べ7,000人ほどがかかわった大きな現場、気候との闘い、見学会への対応など、今までの中で一番思い入れがある現場だったとふり返ります。現場代理人として奮闘した日々を聞こうと、旭川市にある同社を訪問しました。

厳しさが増す時代に高い競争率をくぐり抜けて

旭川工業高等学校土木科を卒業した馬場さん。「父が建築の仕事をしていたので工業高校に入学しました。

建築も興味がありましたが、高校の3年間で将来の進路を改めて考えようと思っていました」と言います。卒業後は大学や専門学校進学という選択肢もありましたが、在学中に行った忠別ダムの現場見学が印象に残り、進路を決めるころには建築への思いはなくなっていました。「土木の仕事で転勤がなく、地元で根付いて働くこと」が希望だったので、市内の建設会社の採用を探しました。ところが、当時はどんどん公共事業予算が減少していたころ。土木科の生徒40人ほどに対して、市内の採用募集は10人程度でしたが、激しい競争率をくぐり抜けて、2001年に川島建設(株)に入社しました。

同社は土木と建築を手がけていましたが、経営基盤の強化のため、土木が主体の橋本建設工業(株)と道路舗装を手がけるアサヒ道路(株)と合併し、2003年11月1日に(株)橋本川島コーポレーションとなりました。

入社後の馬場さんは、農業土木の現場に多く携わってきました。「仕事を始めて20年になりますが、上富良野町や東神楽町など、上川管内の圃場整備などの現場が5割くらいを占めています。田んぼを大きな区画にして平らにしたり、用排水施設を整備したりしました。現場はほとんどが郊外なので、農業とかかわりがなければ、建設業が農業を支えていることを知らない人も多いかもしれません」と言います。

上川地域のお米をはじめ、北海道の農作物のブランド力は、年々高まってきています。馬場さんは、それを根底から支える一端を担ってきました。

何よりも優先したのは、工事関係者の命と安全

2018～19年まで現場代理人を務めたウップツ川の第2期工事は15年ぶりの河川の現場でした。「入社から数年後に橋の現場を担当しましたが、それ以来の大きな工事。農業土木ではほとんど扱わなかったコンクリート工事をはじめ、初めて経験したことが多かった」と言います。大きな現場の代理人も初めての経験で「当初は右も左もわからず、監理技術者で現場に詰めていた先輩に相談する日々でした」と苦笑します。

大小合わせて160本以上の川が流れ、「川のまち」と呼ばれる旭川市で、河川工事に携わることは誇れることです。しかし、それゆえ工事中の安全対策には、細心の注意を払いました。「一番の気がかりは、雨が降った時の増水でした。実際に現場が水没したこともありましたが、何よりも現場のスタッフの命を最優先に対応しました。高さ20m以上での高所作業も多かったので、朝礼ではしつこいくらいに、毎日、安全帯をしっかりつなぐことや近道行為などをしないようになどと言っていました」と笑います。

冬期の河川工事では、川の上にてきた氷板やシャーベット状の雪が積み重なった「アイスジャム」が決壊して、氷と雪の泥流が一気に下流に流れ出す危険性が指摘されるようになっていきます。「社内的にもアイスジャムへの対応は率先して情報共有されていましたが、現実にはアイスジャムの決壊にも遭遇しました」と、常に気の抜けない日々だったようです。



変わる建設業を保護者に伝える

ウップツ川の工事中には、旭川建設業協会らが主催した小学生とその保護者を対象にした現場見学会が開催され、土木工事の役割やコンクリートができる工程などを説明する機会がありました。その時、馬場さんが最初に伝えたのは、建設業が変わってきているということでした。「建設業の現場も働き方改革が進み、4週8休の導入や労働時間の短縮など、3Kの職場ではなくなってきました。それを保護者の皆さんに理解してもらいたかった。子どものころに、親からこの仕事は大変だと言われてしまうと、そのイメージがついてしまいます。親世代の建設業へのマイナスイメージを払拭して、子どもたちにもものづくりに挑戦するきっかけをつくりたかった」と言います。

「ものづくりの楽しさの感じ方は人それぞれ。構造物が出来上がっていく過程を現場で体験すると、きっと建設業の面白さを感じることができるはず。まずは挑戦してほしい」と若者たちにエールをおくります。

馬場さんは、ICT化にも大きな期待を寄せています。入社当時は書類作成が追い付かず、現場事務所に泊まり込んだこともあったとか。「データを入力すると翌日の測定の段取りが不要になるなど、この20年のデジタル化で仕事量は急激に減少しています。マシンコントロールなどの情報化施工で、技術がなくても機械がやってくれる時代もきています。時代に乗り遅れないためにもICT技術に積極的にかかわっていきたい。そして、現場代理人としてもっと信頼を得られるように」と、次の目標に向けて歩み出しています。